日本語学習者の複合動詞の習得における背景要因と因果関係
－決定木分析と構造方程式モデリングによるアプローチ

玉岡賀津雄　(名古屋大学)

研究の目的: 複合動詞は，語彙的複合動詞と統語的複合動詞の２種類に分けられる(姫野，1999; 影山，1999a, 1999b; Tamaoka, Lim & Sakai, 2004)。とりわけ語彙的複合動詞は，２つの動詞が「特有の(idiosyncratic)」結合をしており，日本語母語話者でも複合動詞の意味を２つの動詞の個々の意味の組み合わせから類推するのは難しい(由本, 2005; Yumoto, 2009)。そのため，中国語を母語とする日本語学習者にとって，個々の動詞の意味が適切に理解されていなければ，漢字表記から意味を類推してしまい混乱を生じると予想される。そこで，語彙的複合動詞の習得について，背景要因を決定木分析で，また諸要因の因果関係を構造法的式モデリングの統計手法を使って検討した。

被験者: 中国・天津市の大学で日本語を専攻している１年終了生 65 名と２年終了生 103 名の合計 168 名。

複合動詞の正誤判断テスト: 背景要因を判定するために，語彙的複合動詞(V_1+V_2)について，(1)V_2 が自動詞・他動詞か，(2)V_1 の難易度，(3)複合動詞の意味の具象性の３つの変数からなる語彙的複合動詞を作成した。たとえば，自動詞「上がる」について難易度の低い「立つ」(日本語能力試験級の４級レベル)から作られる「立ち上がる」と，難易度の高い「駆ける」(１級レベル)から作られる「駆け上がる」を対とした。次に，抽象的な条件は，難易度の低い「晴れる」(４級レベル)から作られる「晴れ上がる」と，難易度の高い「震える」(１級レベル)から作られる「震え上がる」を作った。また，他動詞「上げる」について同じような対を作った。意味が具体的な条件では，難易度の低い「持つ」(４級レベル)から作られる「持ち上げる」と，難易度の高い「担ぐ」(２級レベル)から作られる「担ぎ上げる」，次に抽象的な条件は，難易度の低い「書く」(４級レベル)から作られる「書き上げる」と，難易度の高い「縫う」(２級レベル)から作られる「縫い上げる」を作った。このようにして，自他動詞の「かかる」と「かける」，「入る」と「入れる」についても同じような８つの語彙的複合動詞を作成して，３つの変数のバランスを取った合計 24 種類を作成した。さらに，誤りの条件として，「答え入れた」など 12 種類のありそうな２つの動詞の組み合わせの擬似複合動詞を作成した。これらを単文で提示して，「大きな荷物を持ち上げた。」ならば正解，「難しい数学の問題を答え入れた。」ならば不正解を回答するようにした。問題用紙では，正解と不正解の文をランダムに配列して，語彙的複合動詞の正誤判断形式のテスト(36 問，正しい表現は 24 問)を行った。また，これらの日本語学習者に，文法知識を測定するための四者択一形式の問題を 36 問，語彙知識を測定するための同様な問題を 48 問実施した。

決定木(分類木)分析: 語彙的複合動詞について，語彙的特性の３つの変数および日本語学習者が１・２年終了生かの４つの変数で，語彙的複合動詞が使われている文の正誤判断の頻度(正答者数と誤答者数)を予測する分類木分析を行った。分析の結果，主要な要因は V_1 動詞の難易度であった。V_1 動詞の違いから分岐して，「易しい」場合には，日本語学習期間が影響した。さらに，V_2 動詞の他動詞の影響が見られ，最も習得が容易だったのは，複合動詞の抽象性に関係なく，V_1 動詞が易しく，V_2 動詞が他動詞で，２年間日本語を学習した条件であり，85.3%であった。最も習得が難しかった条件は，日本語学習期間と V_2 動詞が他動性に関係なく，V_1 動詞が難しく，さらに V_1＋V_2 が意味的に抽象的な語彙的複合動詞で，正答率が 57.3%に過ぎなかった。日本語学習者の語彙知識の向上と共に習得が進むこと，他動詞の習得が自動詞よりも容易であることが伺える。

構造方程式モデリング(SEM): 語彙知識と文法知識の両方が同時に複合動詞の習得に影響するモデル１と，文法知識が語彙知識へ，さらに複合語に影響するモデル２を比較検討した。モデル１は，文法知識と語彙知識の両方が同時に複合動詞の習得に影響するという因果関係である。モデル２は，文法知識が基本となり，そこへ語彙を埋め込んで多様な表現ができると考え，さらに，それらの語彙の中でも，動詞を２つ結合した語彙的複合動詞の理解が促進されるという因果関係である。モデル１と２の適合度指標(AIC, CAIC)を検討した結果，モデル２の適応度が高いと判断された。モデル２(χ^2=37.191, *df*=25, *p*<.055, *ns.*, GFI=.953, AGFI=.916, CFI=.966, RMSEA=.054, *ns.*)によると，文法知識が基本となり，それが語彙知識へと影響し(β=.60, *p*<.001)，さらに，動詞を２つ結合した語彙的複合動詞の理解が促進される(β=.46, *p*<.01)という因果関係が見出された。つまり，語彙的複合動詞は，語彙知識の延長上に位置づけられ，語彙知識の拡大と共に，習得が進んでいくと考えられる。つまり，文法知識は，語彙を埋め込むための枠組みであり，V_1 がすでに学習している動詞であれば(即ち，語彙知識があれば)，それを含む複合動詞の習得も促進されるという流れである。

参考文献: 姫野昌子(1999)『複合動詞の意味用法と構造』東京: ひつじ書房. 影山太郎 (1993)『文法と語形成』東京: ひつじ書房. 影山太郎 (1999)『形態論と意味』東京: くろしお出版. 影山太郎・由本陽子 (1997)『語形成と概念構造』東京: 研究社. Tamaoka, Katsuo, Hyunjung Lim, and Hiromu Sakai (2004). Entropy and redundancy of Japanese lexical and syntactic compound verbs. *Journal of Quantitative Linguistics, 11(3)*, 233-250.